

高齢者でも、ネットを使う人が多くなった。簡単に物知りになれる。が、振り回されているだけの人もいる。もったいない。

72歳のF子さん。「耳が遠くなる」と、認知症になりやすいという。きつと、私も」と難聴のせいか声が大きい。で、「もの名前がすぐに出てこない」と騒がしい。が、自分から「認知症では？」などと言っているひとは、認知症なんかではない。もとの忘れのテストも頭のMRI（磁気共鳴画像装置）の検査も、F子さんには異常はないのである。

大騒ぎのものは、「中年期以降の難聴が一番大きな認知症の危険因子」という最近の報告が。難聴になると、コミュニケーションがうまくとれない。情報量が減る。社会的に孤立しやすくなる。脳の刺激が少なくなり、認知機能が落ちてくるのだという。説得力がある。

ならば、難聴を補聴器などで改善すれば、認知症を減らすことができるのではないかと考えたくなる。でも、残念ながら、今はまだ、そう言い切れないところが辛いところ。なぜなら、難聴は、一番大きいと

言っても、認知症を発症させる12個の危険因子の一つに過ぎないからである。

また、例えば、糖尿病や高血圧、タバコなどによる脳の微小血管の循環障害のある患者さんの場合だ。循環障害は、難聴も認知症も、どちらにも共通した危険因子である。難聴を改善するだけでは、認知症を予防できないだろう。

だが、補聴器の有益性を報告する研究は増えているという。Fさんのように、難聴以外に認知症の危険因子のないひとは、補聴器の効果を期待できないだろうか。ただ「認知症になるのでは」と思い悩んでいるのは、脳に悪いだけ。まずは、耳鼻科を受診して、補聴器を処方してもらおう。補聴器から入ってくる音から言葉を聞き取るトレーニングも必要だ。

（石黒修三iiiクリニック・脳神経

外科専門医…4/25北國新聞掲載）